

特 258

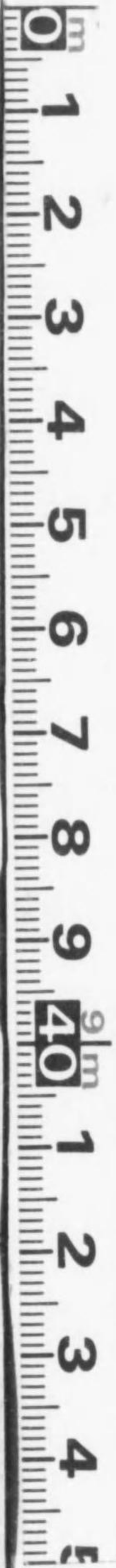
791

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十三)

始



特 258  
721



臨濟宗  
建長寺派  
管長  
菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十三)





碧巖錄提講

第二十七則 雲門體露金風

◎垂示

垂示云、問一答十、舉一明三、見兔放鷹、因風吹火、不惜  
眉毛、則且置、只如入虎穴時如何、試舉看、

讀方

垂示に云く、一を問うて十を答へ、一を舉げて三を明らめ、  
兔を見て鷹を放ち、風に因つて火を吹き、眉毛を惜しまざるこ  
とは、且く置く。只虎穴に入る時の如きは如何。試みに舉す



看よ。』

第二義門に下り、初學の人の爲に婆言を弄します。識者、暫く傍觀したまへ。「問、一答、十」是は宗師家の活作略。——必ずしも恁麼と確定はしてをらぬ。時に依り處に應じ、十に對して一、或は默することもある。要は問者に満足を與ふると宗旨の本分を失せざるとにある。——「舉、一明、三」是は學人の伶俐をさす。俗に目から鼻へ抜けると云ふ拔群越格の者をさす。されど、十で神童、十五で才士、二十過ぐればたゞの人、と云ふこともあるから、舉一明三底必ずしも英雄とは云はれぬ。大智は愚に似たり、と云ふこともある。兔に角一死再活し來つた

人でなければ眞箇の舉一明三底の人とは云へぬ。釋迦や孔子や基督の如きは例外々々。——「見、兔、放、鷹」是は臨機應變と異句同意。例せば、一人が白刃を眞向にかざし、劍刃上の事作麼生、と斬り來つた時、一人は間に髪を入れず、軍扇で、紅爐上一點の雪、と受け流す如きがそれである。——「因、風、吹、火」高きの上つて呼ぶときは其聲小なりと雖も遠きに聞ゆ、と云ふ類で、力を用ふること少にして其功大なりと云ふことである。所謂、順風に帆を揚ぐると同意味。敵の力を利用する底。——苟も宗師家たる人は因風吹火の手腕なかるべからず。恁麼の手腕なき人は猫にして爪牙なきが如し。學者を接得する分なしと



謂ふべし。現今恁麼の人多し。——「不惜眉毛」法の爲め學者の爲めに自己の身心を犠牲に供する、それが不惜眉毛と云ふことである。俗に、慈悲をたるれば糞をたる、と云ふこともある。糞をたれかけられても、時と場合に依りては是非もなし。鴉、何に依つて佛頭を汚す。——「入虎穴」虎口裡横身、と云ふ句もあるサ。——法の爲には、喪身失命も敢へて恐れず、百千の辛苦、無量の危険を甘受しつゝ、笑うて進まざるべからず。然らざれば虎兒は得られぬ。極端に云へば、辛苦の多い程、危険の多い程、随つて所得も亦復多し、と知るべし。以上の垂示を左に再説して参考の一助に供します。

苟も人天の大導師と云はるゝ宗師家は、天鑑無私と云ふ明鏡臺に端坐し、來者の根機々に順應し、如何なる人にも満足を與ふべきである。鐘は打つに随ひ水は汲むに應ずる底、それで行なければ名實相應したる宗師家とは云はれぬ。昔は然り今は然らずである。お互が道の爲に戦死せざるべからず。師家が眞箇の師家となり得ざるは何が爲ぞ。他なし。師學共に眉毛を惜むかが爲である。聞かずや、洪浪の深きに入らざれば意に適する魚は得がたし。虎兒を得るには是非虎穴に入らざるべからず。龍となるには龍門を超越せざるべからず。龍門を超越せず虎穴に入らずして、虎兒を手に入れ龍とならんと欲するは、木に魚、



畑に蛤、古往今來、恁麼の道理あることなし。老婆の葛藤は且く置き、虎穴に入る時の如きは如何。往いて本則に親しく參ぜよ。

◎本則

舉、僧問雲門、樹凋葉落時如何、雲門云、體露金風、

讀方

舉す。僧、雲門に問ふ、「樹凋み、葉落つる時如何。」雲門云く、「體露金風。」

以下雪上の霜、第一義より云へば勞して功なし。されど下化の一方便として是非もなし。——「樹凋葉落時」いづくも同じ

秋の夕暮。「見渡せば柳櫻をこきまぜて、都の春ぞ錦なりけり。」紅顔の美少年、忽焉として半死白頭翁。——或人は云ふ、「生死煩惱の樹は凋み、菩提涅槃の葉は落ちた、眞箇身心脱落の境界、と見るも敢へて不可なし。」と。——秋天廣野行人絶。——

東坡に云はすれば、山高月小、水落石出、乃至、江山不可復識。『圓悟禪師下語して、是什麼時節。』嗚呼末世なるかな。末世々々、嗚呼末世。——敢へて宗師家のみ責任を負はしてはならぬ。未來の宗師家は現在の學者である。學者たる人、刮目して見るべし。耳を洗うて聞くべし。手に唾し足に拍車をかけ、東と示されたら西を知るべし。前と云はれたら後を悟れ。一



聞千悟ならざるべからず。一見百知せざるべからず。當仁不讓、此一大事因縁に當つては、無遠慮に無仁義に邁往勇進。それ、それが學者の學者たる眞箇の本分である。法の爲、道の爲には、宋人の如き仁に似たる仁は必用なし、と知るべし。

宗師家も學者も、時は得難し、失ひ易し。好機再來せず。嗚呼時なるかな。——時なるかな。——此時を失して更に時なし。今だ今だ。兎を見て鷹を放つも、風に因つて火を吹くも、今だ今だ。それ、そこに兎が居るぞ。それそれ、風が吹いて來た。——兎を取逃がすな。風の吹止まぬうち、兎も取るべし。火も吹くべし。兎とは何を云ふ。火とは抑、何か。——師家

も學者も互に最善を盡せ。盡さざるべからず。人身受け難し、今幸に是を受く。大法聞き難し、今幸に是を聞く。——一度人身を失すれば萬劫にも還らず。師家も學者も、眞面目になり、眞劍になり、鹿を逐ふ者は山を見ず、金を擱む者は人を見ず、と云ふ三昧に入り、眼中唯々法あるのみ、利、衰、毀、譽、賞、譏、苦、樂に一瞥を與へず、共に俱に眉毛を惜しまず、法の爲に戦死すべしと注意された。サア——什麼時節ぞ。問僧が事を借りて主を辨ずる底、是ぞ本地の風光ならん。——「體露金風」井上君は、この露は暴露の露で、露の意ではない、「秋風が體に觸れて氣持がよい。」と云ふのが全句の意である、と云うて居らる



が、如何にも氣持がよい。——可謂、八月九月風月好、一聲雨聲雁聲清、と。——無論、體露は全體流露である。——

金風は秋風。五行に配當すれば、秋は金、春は木、夏は火、冬は水。圓悟禪師は、淨裸々赤洒々、と下語して御座る。何時も何事も淨裸々赤洒々でなければ本地の風光は顯現せぬ、と覺悟すべし。是につき故宗演師の提唱が衲の語らんと欲する處を既に語り盡してをらるゝから、それを無言で拜借して左に轉載して見ませう。

「凡そ禪門に於ては、或は不立文字と云ひ、或は以心傳心と唱へても、禪の本領は固より言葉ではかゝぐり當てることは出來

ぬ。然し或程度までは言葉を借りねばならぬ。けれども言葉を用ふれば直ぐに言葉を捉へようとする、恰も月を示すに、月を見ずして指を見ると一般。故に禪門にては文字言句を用ひぬのである。就中、雲門宗は、其の説く所、不可解であつて、容易に其の眞意を獲得することが出來ぬ。嶮峻なる孤峰頂上に於て、翳鬱たる森陰より翩翻たる錦の旗が見えて居る様な風で、とても其の旗の何たるやも見定め難ければ、また壁立萬仞の孤峰、爪も立たねば、寄り付きもならぬ。故に古來雲門の宗風を評して天子雲門と云ひ、臨濟宗を將軍臨濟と云つて、各其の特徴の存する所を示して居る。臨濟は實に、百萬の兵を將ゐて戦列を整



し、威容堂々駿馬に跨りし將軍が、此の大軍を其の指麾の下に、進退起伏自由ならしむるやうな働き振りがあつた。然し雲門は、九重の奥に在りて天下の主權を掌握し給ふ天子の如く、其の表より之を窺ふも更に分らぬやうな様子である。故に本則の如きも、單に文字を以て其の表面より雲門の境界を明らめようとしても、それは不可能事に屬す。他の宗旨家ならば、文字上より或は其の影ぐらひは認得することも出来ようけれども、雲門大師に於ては到底出来ぬことである。』と。——されど雲門宗を無理に孤峰頂上に押込める必用はない。忖度出来る限りは忖度するが修行者の本分である。とは云ふものゝ、眞箇雲門禪師の胸

中は雲門禪師でなければ如何に忖度しても紅心に的中するものでない。』僧、出で來つて雲門禪師に、樹凋葉落時如何、と問ふ。此の問は無論、借事問にして辨主問である。雲門禪師に非ざれば、恁麼の眼、東南を見て意、西北にあり、と云ふ此問に對して、或は繫驢橛の答をなすであらう。』流石は雲門禪師、一見合頭語の如くに似て決して然らず。曰く、「體露金風。」——古人は、問は當に答所にあり、答は既に問所にあり、と云うて居らるゝが、如何にも確言。されど雲門禪師に非ざれば此の確言に暗合することは出来ぬ。雲門禪師の答に依つて、問僧の樹凋葉落時が一層の光輝を放つたことは、是ぞ雲門禪師の場である。



拜知すべし。——此の則に對して古今幾多の専門家は一律一體に、煩惱菩提の葉も落ち盡し、生死涅槃の樹も凋み、さては見惑思惑、煩惱障、所知障等の一切を拂ひ果てた、眞箇脱落の境界、——それが體露金風の面目である、と云傳へ聞傳へてをる。——井上君は、「世の中に於て何事に就ても榮枯盛衰は免れないことではありますが、樹凋み葉落ちて世の中が何となく秋めきて來た時にはどうでせうか、と云うた。すると雲門の申分が面白い。云く、ウム、秋風がそよ〜と吹いて來ると、涼風が肌にしみて仲々氣持がよいノ〜。」と本則に意見を下して居らるゝが、可謂、雲門宗外の雲門宗、と。——作麼生か

體露金風。白隱禪師曰く、「宇治は茶所、よい茶の出所、娘やりたや茶をつみに。」と。——或人は云く、「雲門禪師は一句に三句を具す。此の答は三句の中の隨波逐浪、所謂、應機接物の說法である。」と。——或人は云ふ、「樹凋葉落は今時底、體露金風は那邊底である。」と。——衲は曰く、體露金風、と。——嗚呼醉うた紅葉でこそ楓なり、眞實眞如どうも云はれん。——明治大帝は「あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな。」と。——然り。然りと雖も畢竟百合の一片のみ。——一片、是れ百合。——



## ◎頌

問既有宗、答亦攸同、三句可辨、一鏃遼空、大野兮涼颯颯、  
 颯、長天兮疎雨濛濛、君不見、少林久坐未歸客、靜依熊耳  
 一叢叢、

## 讀方

問既に宗あり、答も亦同じき攸。三句辨ずべし、一鏃遼空。

大野には涼颯颯々々、長天には疎雨濛々々。君見ずや、少林久坐未歸の客、靜かに熊耳の一叢々に依る。

「有宗」意義、深意、瞻仰、——宇宙の間に一物として宗なきものあることなし。——「攸同」問に深意あれば答も亦深意

あり。問に意義あれば答に意義なき能はず。乾坤の内、一物として叩いて應ぜざるものあることなし。——「三句」曰く、函蓋乾坤（一切を抱含する底）、隨波逐浪（臨機應變の所致）、截斷衆流（一斬一切斬の活作略）。必ずしも雲門禪師に限らず、如何なる人の言句にも大なり小なり三句の意味潜在せざるなし。——されど雲門禪師の如く、隨處隨時に異彩を放ち香氣を散ずるに至つては、何人と雖も及ぶ能はず。雲門禪師こそ空前絶後の雲門禪師、蓋天蓋地の獨尊佛である。——「遼空」井上君は、雲門禪師の放たれた體露金風の一箭は遼の國の空中に行つて居る、と云ふ意味に解して居られる。是非は暫く置き、参考の資



料には好箇の珍説である。衲なまは思ふ、一鏃いちさく即遼空、遼空即一鏃。

——一鏃の外に遼空なし、遼空の外に一鏃なし。傍に老婆子あり。曰く、あたれり、的中ちゆうじゆうしましたぞ。——「大野」「長天」

乾坤の内、宇宙の間、總て是れ體露金風。——「颯々」風の木の葉を吹く様子、是も體露金風。——「濛々」雨の靜かに降る

有様、是も體露金風。——「少林」嵩山少林寺のこと。達磨去りて後、幾多星霜を經過す。故に舊時の觀なし。今は大破、目も

あてられぬ。(衲一箇の愚察。)——「久坐未歸客」達磨大師のこと。活達磨はどこに。——「靜依」達磨大師が今日依然とし

て熊耳山の草叢々たる處に坐しておいでになる、と云ふ字面で

ある。果して然りとせば達磨大師は草裡の蟲に變生なされしか。水にも火にも、山にも川にも、處々眞、處々眞、之是が達磨大師の達磨大師たる所以である。——碁は敵手に逢うて行を藏かくしがたし、琴は知音に遭うて始めて彈ずるに好し、と古人吟じて居らるゝが、眞に然りである。如何なる妙手も如何なる巧技も、知音知己を得ざれば徒に琴を撫するのみ、敵手を得ざれば空しく碁を守るのみ。』然るに幸なるかな。師家に、宗說雙通の雲門禪師あり。學者に、句裏に機を呈する問僧もんそうあり。茲に於て佛祖不傳底の妙手功技の活法戰場が展開された。『雪竇禪師は恁麼いんまの活法戰場を自己藥籠中に入れ、團々だんぐとして海嶠かいきやうを離



れ、漸々として雲衢を出づ、と云ふ慣手段を以て本則を頌出なされたは、可謂、老手々々。』問僧、既に是れ尋常僧に非ず。答師、元より越格の宗師家。問既有宗。樹凋み葉落つる時如何、と云ふ此の一問、箭、虚發せず、決して亂發ではない。元より深々たる宗意の存するあり。其の宗意とは體露金風。——答亦攸同。體露金風と云ふ此の一答、功、亂りに施さず、勿謂、合頭語と。蓋し來由あつて巴尾なし。其の宗意を輕視してはならぬ。樹凋み葉落つる底。』——雪竇禪師は、圓悟禪師の所謂、豈兩般あらんや、と主賓を卓上し、更に雲門禪師を層一層卓上して曰く、三句可辨。「雲門禪師の問僧に答へられしは、函蓋乾

坤、隨波逐浪、截斷衆流、其の中何れの句で答へられしか、指示せずとも瞭々分明であらう。」と云はるゝが、サテ諸君、雲門禪師は三句の中ドノ句を以て答へられたか。謂ふ勿れ、函蓋乾坤の句と。無論隨波逐浪の句ではない。然らば截斷衆流の句か。否、然らず。果して然らば如何。圓悟禪師婆言を弄して曰く、「須く是れ三句外の句に向つて始めて得べし。」と。其の三句外の句と云ふ句は如何なる句ぞ。諸君、試みに雲門禪師の三句以外の句、一句を唱へ來れ。——雪竇禪師は曰く、一鏃遼空。之是だ。

——圓悟禪師は此の處へ下語して、箭過新羅、と云うて居らるゝから、雲門禪師の答話は普通の答話を超越して居る、と斷



定する人も多くの人の中にはあります。其の断定で雪竇禪師が肯心するや否やは雪竇禪師に問ふことにして、——孔子の、我道一以て是を貫く、と云はれし其の一貫と異名同意である、と見るも亦是れ一種の見解なり、と衲なまは妄想して居ります。——  
 一鏃遼空、必ずしも言句に限らず。即今お互が必用に應じて動靜云爲、總てが一鏃遼空である。一鏃遼空でなければならぬ。然らざれば一切萬事が徒使徒勞である。流星は雲門禪師、問僧の「樹凋み葉落つる時如何」の答に「體露金風」と切つて放たれた。其一鏃が遼空である。——詩は會人に向つて吟じ、酒は知己に逢うて飲む。雲門禪師の知己會人に非ざれば、詩の味

も酒の味も翫賞することは出来ぬ。雪竇禪師の如きは雲門禪師の知己會人である。故に雲門禪師の意中を洞察して、三句可辨、一鏃遼空、と妙味玄旨を満喫して始めて恁いん厓えいに露出された。』以下、雪竇禪師の三句可辨、一鏃遼空である。——大野兮涼颺、颺々、長天兮疎雨濛々。之是が問僧の樹凋み葉落つる底にして即雲門禪師の體露金風。雲門禪師の體露金風そのまゝが、雪竇禪師の大野兮涼颺颺々、長天兮疎雨濛々である。大野の涼風、長天の疎雨。涼風由來如何なる色ぞ。疎雨畢竟何の處より來る。涼風の色を知り疎雨の來處を知らざれば、體露金風の體露金風たる眞の面目は知れぬ。——如何に秋の風景、秋の色彩、秋



の状態、秋の現況を巧筆を以て書寫し、活舌を以て論談すると雖も、總て是れ體露金風の品評にして眞箇の體露金風に非ず。涼颼颼々の空音にして疎雨濛々の虚滴である。——飯田師は、大野の大、長天の長、此の二字に着目せよ、と云はるゝが、如何にも着目が的中してをる。眞箇大の大たる事實の大、長の長なる實際の長が、我がものになれば、大野兮涼颼颼々、長天兮疎雨濛々、そのまゝで説明も講釋も提唱も分解も用不着。用不着の處に體露金風の大にして且つ長なる當體が流出して居りま<sub>す</sub>。之是の當體に眞箇徹底し眞箇是を賞玩する人は誰ぞ。君不見、絶學無爲の閑道人。——君不知、幻化空身即法身。——

君不見、法身覺了無一物。——雪竇禪師は體露金風の證據人に初祖禪師を呼出された。少林久坐未歸客。聞く、達磨大師は百二十歳の老軀を以て、印度より萬里の波濤を越え支那に着するや、驀直に梁の武帝を訪問、「聖諦第一義」の問に「廓然無聖」と答へ、「朕に對する者は誰ぞ」に「不識」を報い、未だ武帝の禪機熟せざるを洞察し、去つて嵩山少林寺に行き面壁九年。是ぞ少林久坐の面目である。之是の少林久坐と體露金風と、是れ同か是れ別か。所謂、刀刀相似、魚魯參差たり。——大師、皮肉骨髓を四大弟子に分附し、毒を毒と知りつゝ、毒を呑み、遷化の相を示し隻履を携へて西天に歸られし。『嘘乎、將亦實



乎。——實の如くにして嘘、嘘の如くにして實。恁麼は體露金風の體か相か用か。——眞箇の當體は生きた達磨大師でなければ知れぬ。即今生きた達磨大師は那邊にをる。未歸客、とあるから、達磨大師は印度には歸らぬ。依然として支那にをる。支那のどこにをる。大野兮涼颺颺々、長天兮疎雨濛々、の處にをる。大野、——長天、——支那の專有にあらず。宇宙の共有、乾坤の所爲。果して然らば、普天率土、達磨大師のをられざる處はない。體露金風のなき處はない。相逢うて相知らず共に語つて名を知らず、とは之是を云ひしならん。敢へて鐘や大鼓を鳴らして達磨大師を尋ね廻るには及ばぬ。

達磨大師は、それそこに、靜依熊耳一叢々。(熊耳峰は達磨大師を葬つた處。)雪竇禪師曰く、體露金風の保證人は、それこの熊耳山、叢々たる草裏に坐禪して御座る。坐しながら曰く、嗚呼實に何とも云へぬよい心地だ。——熊耳山と云うて遠い處ではありません。叢々たる草裏と云うて必ずしも草の中とは限らぬ。諸君、お互が坐して居る處、立つて居る處、それが即熊耳山で、即それが一叢々で、即それが體露金風。——道元禪師の詩に、

生死可憐雲變更、迷途覺路夢中行、  
只留一事醒猶記、深草閑居夜雨聲、



「生死可憐、雲變更」元來生死なし。なき生死をありと執着する人こそ、憐れむべし悲しむべし。看よ、雲の集散、離合。生死は畢竟それと同じ故に、愛すべき生に生の實あるに非ず、嫌ふべき死に實の死あるに非ず。「迷途覺路夢中行」迷途の相對には生も死も悟りも迷ひも善惡、禍福、吉凶等々が事實にある。されど覺路の絶對には生も死も悟も迷も、善惡、禍福、吉凶等々はありません。迷途覺路も向上の那一方より大觀し來れば、何れも一枕の睡夢である。向上の那一路に到達すれば、「只留一事醒猶記。」却來底、——悟つた身にも雪の降る日は寒きこそあれ、で、雨の降る日は雨の音が聞える。——「深草閑居夜雨

聲」門外、何の聲ぞ。雨滴聲、——夜雨のしたゝる音がポトリく。此間、生ありや死ありや、迷ありや悟ありや、善惡、邪正、禍福、吉凶ありや。自もなし他もなし。盡十方法界、唯此の雨滴聲のみ。——茲に達磨の生きた達磨大師が、茲に體露金風の生きた體露金風が、活潑々地に大活動をしてをる。』諸君、體露金風、その妙處妙味を得んと欲せば、舉一明三の活眼を開き、兎を見て鷹を放ち風に因つて火を吹く機變を具し、而して一身を犠牲にし、進んで虎穴に入るべし。虎穴に入りて一死再活すべし。一死再活せざれば、達磨に逢うて達磨を知らず、體露金風に接して體露金風を見ず。かゝるお人は盡未來際



鬼窟裏作活計底の漢である。可悲、可憐。——

(昭和十二年九月二十五日講演)

第二十八則 南泉不說底法

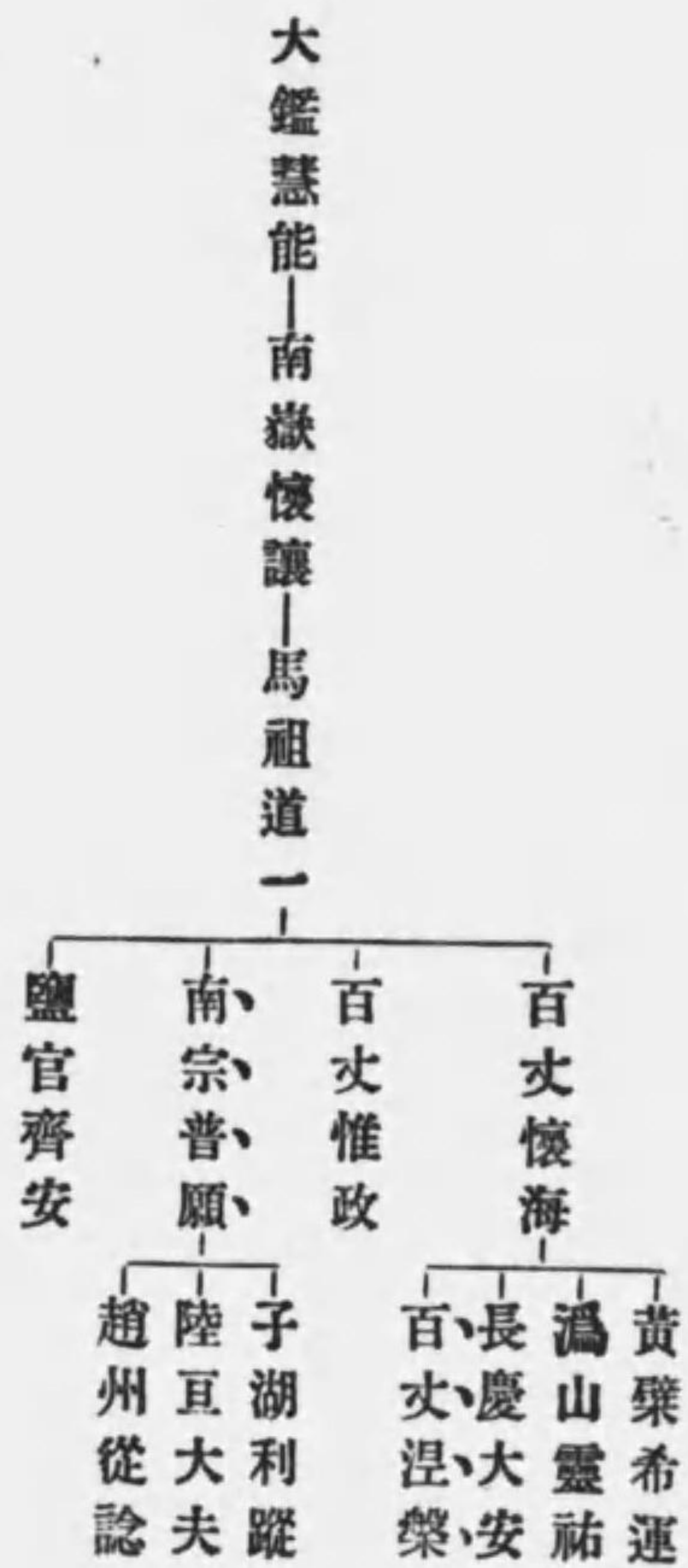
◎本則

舉、南泉參百丈涅槃和尚、丈問、從上諸聖、還有不爲人說底法麼、泉云、有、丈云、作麼生是不爲人說底法、泉曰、不是心、不是佛、不是物、丈云、說了也、泉云、某甲只恁麼、和尚作麼生、丈云、我又不是大善知識、爭知有說不說、泉云、某甲不會、丈云、我太慙爲爾說了也、

讀方



擧す。南泉、百丈涅槃和尚に參す。丈問ふ、「從上の諸聖還  
 人の爲に説かざる底の法有りや。」泉云く、「有り。」丈云く、  
 「作麼生か、是れ人の爲に説かざる底の法。」泉云く、「不是心、  
 不是佛、不是物。」丈云く、「説き了れり也。」泉云く、「某甲は  
 只恁麼、和尚は作麼生。」丈云く、「我又是れ大善知識にあ  
 らず。争でか不説を説くこと有るを知らんや。」泉云く、「某甲  
 は不會。」丈云く、「我、太愍しく、爾が爲に説き了れり。」  
 例に依り多少の分解を加へつゝ、愚見を述べて見ませう。南泉  
 普願和尚と百丈涅槃和尚の法脈關係は左の如し。



南泉普願と百丈涅槃とは法脈の上で叔父、甥の間柄であります。  
 叔父たる南泉が甥に當る百丈に問ふとは少々不思議に思ふ人も  
 なきにもあらず。されど眞箇此の一大事因縁を研究するに當



つて、年齢や位階の次第を彼れ是れと齒牙に掛くるやうでは到底大事了畢は出来ません。三歳の童子と雖も、我より勝れたる處あれば是を師として學ぶべし。——其の年齢を師となすに非ず、其の學徳を師となすのである。——現今學者の學徳そのもの、向上せざるは、蓋し年齢や位階を師として其の學徳道風を師となさざるが然らしむるのである、と納は思ひます。

——南泉普願禪師は當時の僧中では旺盛なる研究心の所有者。百丈涅槃禪師は涅槃經の専門家、故に本名の法政を人呼ばずして、渾名の涅槃が本名の如く使用されて居るは蓋しそれがためであります。研究熱心の南泉、學徳拔群の百丈に參問する、

何の不思議かあらん。當然すぎる程當然である。一應本則の分解。

「參」禪家の術語。——朝の入室を朝參と云ひ、晩の入室を暮參と稱す。參の字は參詣の參の字であるが、意味に於て大なる相違のあることを心得をくべし。參は參禪入室の略語と承知あれ。——「從上諸聖」古來の聖賢、昔より今日迄の聖賢を云ふ。無論三世の諸佛、歴代の祖師それらを總合して。——「不爲人說底法」必ずしも神秘的の意味ではありません。言語文字を以て如何ともなし得ざる唯佛與佛の以心傳心底、それを斯く云ふのである。——「不是心、不是佛、不是物」文字に翻



弄されてはならぬ。由來禪は不立文字を以て文字となす宗旨である。故に苟も禪を修せんと欲する人は其理由を承知して居らぬと文字言句に愚弄されます。——眞理そのもの、大道そのものは、不是心、不是佛、不是物。——畢竟、言語道斷、心行所滅、之是が不爲人説底法。要は自知、自覺、自得、自證するにありと知るべし。——「説了也」意見はそれで終結であるか、と云ふ意なり。——「某甲只恁麼」拙僧の意見は以上陳述した如くである。廣義に云へば、峩々たる山は山で不是心、不是佛、不是物。——潺々たる川は川で不是心、不是佛、不是物。——柳は緑で、——花は紅で、——それ／＼がその

ま、不是心、不是佛、不是物、——「爭知有説不説」井上君は、不説を説くことあるを知らんや、と訓じて、從來の聖賢の未だ曾て説くことの出來ざる、それを説くことは到底出來ぬ、と解せられた。一應面白い御意見である。——此句は軽く、拙僧は大善知識のお仲間でない故に佛祖が人の爲に説いたとか説かぬとか云ふことの有無は一切知らぬ、と見るが或は適當かも知れぬ。(賢明なる諸君の御高説を俟つ。——「太愍」愍は殺と同意。井上君、示して曰く、愁殺、惱殺の殺(サイ)で唐宋時代の俗語、(すてきに)とか、(うんと)とか、(どつさり)とかに當る、と。如何にも太愍であります。』更に繁を顧みず蛇足を添へ



て見ませう。此の二十八則には例の垂示がありません。垂示が無いと何となく寂寥であります。其の寂寥を補ふ爲に、從容錄第六十九則南泉白牯びやくこの話に萬松老人の示衆がありますが、其の則の意味が此の二十八則と大いに共通點がある故、今こゝに其の示衆を拜借して、此の則の垂示として諸君の一覽に供します。

——示衆云、成佛作祖、嫌帶汚名、戴角披毛、推居上位、所以眞光不耀大智若愚、更有箇便宜聾件不采底、知是阿誰。』

讀方及び分解を略し直ぐに總説にかゝります。『成佛作祖は無論結構であります。されど佛になりて佛の處に坐在し、祖となりて祖の處に端居してゐては、佛と云ふ汚名を帯び、祖と云ふ

汚名を帯びたので、寧ろ成佛作祖せざるがましである。——

戴角披毛は牛馬で、云ふ迄もなく下等動物、されど少しも己見を抱かず、一點の私心を用ひず、常に戴角披毛の本分を露堂々ろだうたうに盡す處は實に尊い。推して上位に据ゑ措く、敢へて不思議はない。——佛には毫光ごうかうがあるから拜し、牛馬には角毛がある

から鞭つ、と云ふは頗る淺薄の見解。佛祖も牛馬も、無我無心にして自己の本分を盡す處に、眞箇の佛祖と眞箇の牛馬がある。その眞箇の牛馬、眞箇の佛祖に至つては、元より牛馬の名もなく、佛祖の名もなし。然るに恁麼いんまの道理に不明の人は成佛作祖と披毛戴角との二見對待たいたいに涉り尊卑の良に掛かつて自由自在の天



分を失却す。——眞光は耀かず大智は愚の若して、眞物は眞物で、其の光明は他の點檢を待たぬ。大智はどこまでも大智で、愚物の及ぶところでない。眞光や大智は賢愚を以て、量り大小を以て論ずべきものではない。成佛作祖と云へば、金箔の附いた木像か五彩の雲の上に居ることの様に思うて居るは大なる間違。灰頭土面、それが佛祖の眞光、——和泥合水、それが佛祖の大智。——之是の大智、之是の眞光そのものそれは、聾に便宜、不采に伴はる處に層一層の眞價値が顯現する。才氣ありながら愚人の様子をして居る處に、有徳でありながら無徳の如くにして居る處に、眞箇の徳が巍々然としてをり、眞箇の才

氣が洋々焉として居る。恁麼の人は誰ぞ。南泉禪師その人である。——南泉禪師、示衆に云く、「三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有。」と。此則に依りて眞光の眞光たる所以を悟り、大智の大智たる所以を悟得すべし、と萬松老人は學者の爲に灰頭なされた。』その南泉禪師の示衆、「三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有。」と云ふ其の意旨那邊にありや。云ふ勿れ、三世諸佛など、云ふもの、有ることを知らぬが、狸奴白牯のあることは承知して居る、と。——三世諸佛は、有ることを知らざるが故に三世の諸佛として尊敬せられ、狸奴白牯は、有ることを知るが故に狸奴白牯として輕賤せらる。——知るべし、諸佛と白牯



と兩者を並べて尊卑の判別や貴賤の論量をなすのではない。三世の諸佛と云ふ時は三世の諸佛の外に狸奴白牯なく、——狸奴白牯と云ふ時は狸奴白牯の外に三世の諸佛なし。——故に知と云ふも不知と云ふも、世間普通の知不知に非ず。或時は紫磨黄金の三世諸佛と現じ、或時は披毛戴角の狸奴白牯と顯る。

——要するに語句に囚はれず、其時、其處、其位に感應隨順し、任運騰々(悠々自適の貌)、騰々任運たる心地性海、平穩の靈境妙界より流露するに非ざれば、如何に震天動地の大事業をなすと雖も一切魔事邪業であると知るべし。』——茲に大久保彦左衛門の三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有、と云ふ挿話を加へて措きます。(衲が落草談を笑ふ勿れ。)

彦、「馬を曳けツ。」馬に乗つて、槍持は例の太助。太、「殿様、何處へお出でになるのでございます。」彦、「隣家の川勝へ行くのだ。」太、「エ、ツ隣家、——隣家へ行くなら、馬に乗つたり槍を持つたりして行かなくつたつて、垣根でも飛び越えて行きやア譯はねえちやア御座いませぬか。」彦、「餘計な事をいふな。少し仔細があるから焦して行くのだ。」——ポク／＼馬に乗つて屋敷を出ると、直ぐ隣が川勝丹波守の屋敷になつて居ります。其の川勝の屋敷へ入つて來た。誰が來たのかと思つて見ると大久保彦左衛門だから、門番が驚いて、老爺さん耄碌をして



屋敷を間違へたなと思つて、門、「エー是れは大久保様、お間違では御座いませんか。貴下様のお屋敷はお隣で。」彦、「知つて居る。今日は彦左衛門、客に参つた。取次げ。」門、「へエー。」隣だから着流しで、今日は、と云つて来れば宜いのに、と思つたが、門、「お客——ツ、大久保彦左衛門様。」——川勝の家來が驚いた。隣だと云ふのに鹿爪らしく馬に乗つて槍を立て、やつて来たから變に思つたが、出迎へない譯に往かないから出迎へる、一方丹波守に告げる。丹波守が出迎へに出ようとすると、モウ彦左衛門、遠慮なしにズン／＼入つて来た。

丹、「イヤ是れは大久保氏、態々御出でにならずとも、お隣の事ゆる手前の方から参上いたすものを。」彦、「イヤ今日は用事では御座らぬ。何か世間の話をしようと思つてな。——決して構はつしやるなよ。構はれると彦左衛門、迷惑をする。大した馳走には及ばぬ。先づ刺身に鹽焼、吸物に後は酢の物、好い酒が二三合あれば宜しい。」（それだけあれば誰でも澤山だ。）世間話をして居るうちに會席の膳が出る。酒が出る。

彦、「イヤ川勝氏、御身に尋ねるが。」丹、「ハ、何事で御座る。」彦、「元和元年大阪夏の陣、あの時貴公は良い馬に乗つて戰場を駆け廻つて居られたが、あの馬はまだ居るかな。」丹、「されば誠に良い馬で御座つた。年久しく相成りまするが、未だ息災で居



りまする。」彦、「ア、まだ壯健で居るか。どうか御目にかゝりたいものだ。」丹、「ハ、ア。」彦、「其の馬に御目にかゝりたいものだ。」丹、「老人、馬に御目にかゝりたいなど、相變らず冗談ばかり仰しやる。只今曳出して御覽に入れる。」——コレ／＼青鹿毛を是れへ。」——家來が心得て、聽ての事に青鹿毛といふ川勝丹波守自慢の馬を庭前へ曳いて來る。彦左衛門ツカ／＼と縁側へ出て來て、彦、「イヤこれだ。良い馬だ。一點の非の打ち所のない適れの駿足。」——川勝氏、此の馬は知行何程で御座るな。」丹、「ハ、ア。」彦、「イヤサ此の馬の食祿は何程で御座るかな。」丹、「是れは老人御戯れと見える。馬に食祿を遣はす者が

御座らうか。アハ、、、、」彦、「それでは無祿か。——是れはどうも怪しからぬ。川勝殿の側に居ること十年餘、幾十度かの戦場の供をして今は年も老り、之が人間なれば千石二千石の知行取りにもなつて居るものを。哀れな奴で御座る。」と云ひながら、馬の鼻づらを撫で、ホロリ／＼と涙を流して居る。川勝丹波守を初め家來達は、大久保彦左衛門も口では大きなことを云つて居るが、耄碌したものと見えて、馬を捉へて愚痴を零して居る、と内心笑つて居る。と、彦左衛門が、「御家來の衆、乃公の膳を是れへ。」——と云つて縁側を叩いて居る。何か食べるなら座敷へ來て食べたなら宜さ、うなものだと思つたが、云



はれる儘に膳を縁側の所へ持つて來ると、彦、「コレ青鹿毛、貴様は可哀相だ。サア此の膳を貴様にやるから食べる。サアく遠慮なく食べる。」といひながら膳を出してやると、青鹿毛は、青、「是はどうも御馳走様。」とバクリくやつて居たが、青、「此奴は旨い。一杯熱いのをキューツとやりたい。」そんな事も云ふまいが、馬が旨さうに食べて居るのを、彦左衛門、嬉しさうに見て居たが、彦、「青鹿毛、貴様は感心だ。貴様の主人の川勝丹波守は元は小身者であつたが、今日は八千石の高祿、天下の旗本だ。偉い出世をしたが、貴様は未だに出世をしないで相變らず人を乗せて居る氣の毒なものだ。忘れもしない。元和元年五月

大阪夏の陣に、眞田幸村が仕掛けたる地雷火一度に破裂して、味方の軍勢散々になつて敗走する時、貴様の主人川勝丹波守は青くなつて、貴様の背中に乗つて第一番に逃出した。處が途中に小川があつて通る事が出来ない。それを貴様が勢ひ烈しく一飛びに其の川を飛越えて逃げたが、若しあの時貴様がなかつたら、主人丹波守は追迫る敵の爲にあの小川の縁で首を搔かれる處であつた。貴様といふものが居た爲に、命も助かり、首を搔かれず逃延びる事が出来た。其の逃げた主人丹波守は八千石の堂々たる天下の旗本、出世をしたばかりか、金があるに任せて妾を二人も置いて、酒色に耽り亂痴氣騒ぎをして居るのに、



其の主人を助けた青、貴様は未だに無祿で、厩で藁や豆ばかり食はされて居る。ア、氣の毒なものだ。それを何一つ不足も言はず、姉妹の妾も置かず、おとなしくして居るとは、實に感心なものだ。主人丹波守を助けた貴様は偉い。偉い奴だ。感心な奴だ。」と大きな聲で云ひながら馬の鼻面を撫で、居る。驚いたのは川勝丹波守、顔色を變へてブル／＼震へて居ます。——  
 彦、丹波殿、青鹿毛のお蔭で命を全うした御身、女の爲に家が亂れ家が潰れるやうな事があつたら、畜生に劣る所業、イヤ御用心々々々。御馳走で御座つた。ハイ左様なら。」——  
 以上、是は大久保彦左衛門の、三世諸佛あることを知らず、狸

奴白牯却つてあることを知る、と云ふ一則の公案。衲なまは敢へて説明を加へません。諸君のお力にて可然御判断を願上げます。』  
 是より愈々南泉不説底法を提講致しませう。——茲に改めて云ふまでもなく、我が大法は、説のとき黙にして、黙のとき説である。單に説、單に黙は何れも不可。所謂、語黙動靜體安然、と云ふ境界を體得すれば、説の時、黙の時、黙の時、説の時。——説の上で眞理を顯し、黙の上で大道を現ずる。然るに、説の時は説に捉へられ、黙の時は黙に囚へらるゝ様では、説も不可、黙も亦不可。——眞理大道は語黙の形式には關係あることなし。されど高穹の月は指頭に依りて始めて覺知する。故



に古人語默の指頭を借りて高穹にある眞如の月を體得する、元より不可なし。——見よ南泉普願禪師が涅槃經の講釋に通徹なされた涅槃和尚を訪問せられた。すると學者的態度を持つて居らるゝ涅槃和尚、是れ時なり、と思つたものと見えて驚直に、從上の佛祖方が未だ曾て人の爲に説かざる底の法あるか、と問を起された。(之是の一問、獅子の乳の如く、象王の鼻の如く、楊基が箭の如し、と古人は評してをる。宗旨は無論此の一問にあり。餘の二問三問は此の餘響。) 諸君の既に知らるゝ如く、從上の佛祖は既に説き得らるゝだけ説き、語り得らるゝだけ語り、示し得らるゝだけ示し盡された。五千餘卷の經文、一千七

百則の公案が、先づそれである。此の外に未だ曾て人の爲に説かざる語らざる示さざる法があるか、と云ふのである。——從來の法と名づくべきものありや。況んや説く、語るの示すのと云ふことの出來得べき所以はない。——恁麼の道理を知りつゝ百丈禪師が問うて來たから、油斷は大敵、注意必用。泉云く、有。手に寸鐵なしと雖も胸に百萬の兵あり、で來機に應じ、有、と即答された。——此の有こそ從上の諸聖の還つて人の爲に説かざる底の法である。豈啻に此の有のみならず、廣義に云へば百丈の問うた、從上諸聖還有不爲人説底法麼、と云ふも先聖未發の法である。丈云く、「作麼生是不爲人説底法。」



と斬りかけた。或人は、山も鳴り谷も響いて來た、と評して居る。如何にも山岳震動の様子がある。(法は元來、不説不聞。其の不説不聞底を從上の諸聖すでに説き盡せり。如何ぞ人の爲に説かざる底の法あるべき。)サーあるなら云うて見よ、と間に髪を入れる餘裕を與へず逼つて來た。其の時泰然自若として泉云く、不是心、不是佛、不是物。(當時盛んに唱道されし馬祖の即心即佛を或僧問うて云く、如何か即心即佛、と。馬祖云く、小兒の啼くを止めんが爲なり。其僧復また問ふ、小兒が啼き止んだ後如何。馬祖云く、非心非佛。其僧進んで問ふ、即心即佛と非心非佛を除いて如何。馬祖云く、不是物、と。)南泉は今、以上の三箇の

不是を一にして、不是心、不是佛、不是物。これが從上來諸聖の人の爲に説かざる底の法であると提唱して御座る、と云ふお人もある。』心でもない、佛でもない、物でもない。ないと云ふ言句に因はれては南泉が泣くぞ。南泉の意は、ないと云ふ處にはない。只是れ、滿身言語三昧。——丈云く、「説了也。」説かざるの法でなくして立派に説いたでないか、と人を殺さば須く血を見るべしで、一層猛烈に南泉を攻めつけた。「某甲只恁麼。」法戦が段々と興味を増して來た。既に説いたか、未だ説かぬか、我は關せず。某甲は只如此、和尚作麼生、と槍頭を轉じ來れり。防守變じて攻勢となつた。然らば貴殿は如何に、と獅子奮進。



此の推出しの強いこと、尋常の漢では逆もお相手は出来ぬ。丈云く、「我又不是大善識、爭知有說不說。」是を轉身の妙と云ふ。(恁麼轉身の自在なければ一方の宗師家とはなれぬ。)拙僧は天下の大宗師家でない。法に説、不説などのあることは更に存ぜず。——圓悟禪師は下語して、「爛泥裏有刺。」と云うて居らるゝ處を見ると、丈の我又不是云々は綿裏に針を藏してあるかも知れぬ。流石は南泉、その手は桑名の焼はまぐり。泉云く、「某甲不會。」私には何といふことだか委細わかり不申、手輕に對抗。——先も先なら、こちらもこちら。——茲に説、不説底の眞面目が露堂々たり。——丈云く、「我大慙爲、備説了、

也。」前には泉云く、「説了也。」今は丈云く、「説了也。」之是の兩箇の説了也、所謂、一賽兩彩、兩彩一賽。——丈と云ひ泉と云ひ、兩人共に舌頭無骨、——胸中無意。——諸君、人の爲に説く法だの、人の爲に説かざる法だの、と云ふ言端語端に迷溺し、深意のある處を失却する勿れ。上來の葛藤は南泉、百丈、兩禪師の三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有、それであります。而して以上の總ては衲が諸君の爲に説了也であります。

## ◎頌

祖佛從來不爲人、衲僧今古競頭走、明鏡當臺列像殊、一々面南看北斗、斗柄垂、無處討、拈得鼻孔失却口、



祖佛從來人の爲にせず。衲僧今古頭を競つて走る。明鏡臺に當つて列像殊なり、一々南に面して北斗を看る。斗柄垂る、討ぬるに處無し。鼻孔を拈得して口を失却す。』

以下、頌につき提講、例に依つて老婆談。

「不爲人」古徳云く、諸佛曾て出世せず、亦一法の人に與ふべきなし。又曰く、吾宗に言句なし、禪と云ふも佛と云ふも、白圭のキズ、明鏡の汚點。人の爲にせざる所が人の爲にしたる所。』かはい、子に旅をさせる、愛兒に他人の飯を喰はず、云ふ勿れ無慈悲と。無慈悲是れ無上の大慈悲。——畢竟心外に法

なし、一切唯心造。自知せよ自覺せよ。——「競頭走」法の爲に、道の爲に、南去北來、東奔西走。一字不説の端的は明師を尋ねて悟らざるべからず。以心傳心の妙處は良友を訪うて研究せざるべからず。好箇の典型は夫れ三登九至乎。——されど回光返照を忘却すべからず。——「列像殊」一面は平等、一面は差別。平等面上には一點塵埃なし。差別面上には森々羅々、無量無數の列像あり。不爲人、是は平等面上。——列像殊、是は差別面上。——されど知るべし、平等即差別、差別即平等たることを。要するに人々具足の明鏡そのもの、外ではない。——「面南看北斗」俗に云ふ見當ちがひ。南に面しては南斗



は見えるが北斗は見えぬ。北斗を見んと欲せば北に面せざるべからず。されど禪學者は南に面して北斗を見る。本來無東西、何處有南北。——「斗柄垂」曉天に近い。好機は得がたし。好時は失ひ易し。グヅ／＼して居る中に夜があけるぞ。今だ々々。

——「無處討」打鼓普請看、で鐘や大鼓で一村擧つて尋ねても見あたらぬ。見あたらぬはずだ。面南看北斗、だから。——「拈脚下を見よ、それそこに。切らんとすれば老松の影。——」「拈得鼻孔、失却口。」如何にも禪味が十二分に含みし如くに思はるゝ。否、然らず。鼻をつまゝれてもわからないと云ふ程の暗さ、と云ふこと。——或人は一得一失と見て居る。南泉、百丈、

兩禪師の活商量底、取る取るに非ずして取り、捨つる捨つるに非ずして捨つ。その様子、そのありさま、之是の句である。更に雪上に霜を加へませう。

祖佛從來人の爲にせず、と云ふ此一句に南泉と百丈の商量底を雪竇禪師は頌じ盡せり。——釋迦如來でも達磨大師でも其の他幾多の高僧知識でも、眞箇の眞理、眞箇の大道は、言語文字を以て示すことも、作略方便を以て教ふることも出来ぬ。若し、作略方便を以て教へ、言語文字を以て示せば、示すほど遠くなり、教ふるほど錯る。絶対の眞理、絶対の大道は、言語文字を超越し、作略方便を脱出して居る。故に言語道斷、心行所滅と云



ふ。釋迦如來の如きは最後に四十九年一字不説と自白せらる。如何に言語文字を巧みに弄しても砂糖の甘味は顯現されぬ。如何に作略方便を妙に使うても唐辛の辛味は抽出されぬ。砂糖の甘味、唐辛の辛味は、自分自身で嘗めて始めて知るべし。喫して茲に覺すべし。眞箇の眞理、眞箇の大道も亦斯くの如し。自知自覺するより他に方便も作略も言語も文字も用不着である。されど知るべし、一切の言語文字も眞理、一切の作略方便も眞箇の大道であることを。—— 衲僧今古、頭を競うて走る。眞理、大道は、自知自覺すべきものなり、と云ふことを知らざる人は、古も今も一律一體に、狂人が狂人を追ふが如く、一人東に走れば我も亦東に走り、一人西に走れば我も亦西に走る。走り走り走りて畢竟得る處、骨折り損の草臥儲けが關の山である。——

とは云ふもの、或一面から云へば、其の骨折り損の草臥儲け、其の東奔西走底が、そのまゝ、それが眞箇眞理の眞理、眞箇大道の大道。—— 果して然らば、頭を競うて走るが上にも更に頭を競うて走るべし。—— 此の筆法より推せば、五千餘卷の經文も、一千七百則の公案も、その他一切の事々物々、そのまゝ、眞箇の眞理、眞箇の大道である。無論然り。然りと雖も、そこに多少の仔細あり。—— 百丈の間、元より悪しからず。南泉の答、敢へて不可なし。是の方面より見れば、南泉、百丈共



に是、——非の方面より見れば、百丈、南泉共に非。——非と云ひ是と云ひ、從來是非あるなし。是非は其の人にあり。信ぜざれば見よ、之是の明鏡を。——盡十方世界一箇の明鏡、胡來り胡現じ、漢來り漢現ず。——正位平等の明鏡に偏位差別の列像が顯はる。極言すれば祖佛不爲人説底の明晃々、白的々たる古鏡に映出した姿を見れば、南泉には南泉の眉目があり、百丈には百丈の鼻孔がある。——されど古鏡は百丈去れば百丈の痕を止めず、南泉去れば南泉の迹を留めず、依然として明晃々、白的々たり。——恁麼の古鏡、畢竟他にあらず、人々具足、箇々圓成。雪竇禪師、落草して曰く、一々面南看北斗。

斗。南泉は南泉で南に面して北斗を見、百丈は百丈で南に面して北斗を見る。コレが、不爲人の爲人底、不説底の説法底である。——圓悟禪師は下語して曰く、老僧が佛殿に騎つて山門に出づるを見るや、と面南看北斗底を示された。——諸君、面南看北斗底がお手に入りましたか。未だ十分お手に入らなければ次の句に參ぜられよ。斗柄垂、それそこに、斗柄がぶら下つて居る。お月様いくつ、十三七つ、まだ年わかいな、あの子を生んで、此の子を生んで、誰に抱かしよ、おまん抱かしよ、おまん何處へいつた、油かひに茶かひに、油屋の前で、氷が張つて、滑つてころんで、油一升こぼした、其の油どうした、太郎



どんの犬と、次郎どんの犬と、皆なめてしまつた、其の犬どうした、太鼓にはつて、あつちの方でもどんどん、こつちの方でもどんどん。——柳は緑、花は紅、南泉は南泉、百丈は百丈、諸君は諸君、衲は衲、分明に斗柄は垂れてをる。聊かなりとも此の間意思を用ひて見んと要すれば没蹤跡、——無處討。圓悟禪師の下語に、椀子地に落ちて椽子七八片となる、とある。いかにもく。見んと欲すれば見えず、闇昏昏。——或人は、討ぬるに處なし、と云ふ處が討ぬる所である、と云うて居らるゝが、禪機と云へば禪機かも知れぬが少々理窟に流れ過ぎる。斗柄垂、無處討、是を本則にかけて云へば、南泉、百丈、

兩禪師の不爲人の爲人、不説の説は、目前に分明である。其深意は、其妙味は、と云はるゝと捕捉することは出来ぬ。眞箇討ぬるに處なし。その眞箇討ぬるに處なき處が南泉の面目にして百丈の鼻孔である。サー其の面目、其の鼻孔。「拈得鼻孔、失却口」或人は、鼻をつまんで口あんぐり、丸で馬鹿見たやうな風をして、相變らず、「不爲人説底法」をさがして居る、と云はれる。或人は、南泉、百丈、兩禪師の商量は、所謂、前にあるかとすれば忽焉として後にあり、鼻をつまめば口が逃げる、口をつまめば鼻が逃げる、と云ふ按排で、其の人に非ざれば其の深意、其の妙味は、決して知れるものではない、と云ふ。——異説は異



説として、衲は衲で曰く、自分の口で飯は喰ふ、自分の尻で糞を垂れる、佛のお世話にも祖のお世話にもならぬ、されど口の世話と尻の世話にはなる。——那裏より這の消息を得来る。佛祖不傳の傳。——云ふ勿れ、人の爲に曾て説かざる底の法を説くと。——三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有。

(昭和十二年十月九日講演)

第二十九則 大隋隨他去也

◎垂示

垂示云、魚行水濁、鳥飛毛落、明辨主賓、洞分縑素、直似當臺明鏡、掌内明珠、漢現胡來、聲彰色顯、且道爲什麼如此、試舉看、

讀方

垂示に云く、魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。明らかに主賓を辨じ、洞に縑素を分たば、直ちに當臺の明鏡、掌内の明珠に似て、漢現じ胡來り、聲に彰れ、色に顯る。且く道へ、什



麼んとしてか、此この如くなる。試みに擧す看よ。』

分解を兼ねて提講。「魚行、鳥飛」此の二句は、學者の一居一動、一言一句に於て、正師家が本人の全胸中を痛快に洞觀する舉一明三底、それでありませぬ。井上君は「雨の降るとき天氣が悪い、兄はわしより年が上」と云ふ事實を斯く云うたものだと云うて居られる。』語り得て妙、云ひ得て好し。——「主賓」必ずしも主賓に限つたことではありません。大小でも長短でも晴雨でも東西でも決して差支はない。——「緇素」是も黑白に限つてはをらぬ。明暗でも寒暑でも前後でも輕重でも更に不都合はない。——「聲彰色顯」所謂、思おも内うちにあれば色いろ外そとにあら

はる、麝じやあれば自然に香し、と云ふ底。明珠を掌の上ののせて、かちく／＼音をさせて見ると、其の音響によりその色合によつて、明珠の眞偽が顯然明白になると云ふ。蓋し正師家が學者を點檢する一種の手段と見て敢へて妨なし。——お互が承知しつゝあるが如く、魚が水中に泳ぐ、魚自身は水を濁さうとは思はぬ、然れども泳げば濁る。——鳥が空中に飛ぶ、鳥自身は毛を落さうとは思はぬ、然れども飛べば落ちる。——それと同じく、政治家が動けば政治家の痕が付き、教育家が動けば教育家の迹がのこり、宗教家が動けば宗教家の臭が漂ふ。禪學者が動けば禪學者の影が現ずる。是は自然の道理、極めて平凡な



ことであるから、世間一般の人は疾うの昔に御承知してをらるゝ。然るに此の頗る平凡の事を知らぬ師家が多くの師家の中にある。かゝる師家に指南を受くる學者こそお氣の毒でならぬ。

—— 苟も一方の師家たる人は、學者の一言一句、一舉手一投足に於て、其の人の五臟六腑まで徹見透達し盡すでなければ師家の看板をかけぬがよい、と或人は云はるゝ。『衲も同感である。—— 雨が降つて居る日は、人に間はぬとも天氣の悪いことがわかる。—— 年を取つた人に逢へば、聞かなくとも老人たることが知れる。—— 我に活眼、正法眼があれば、主賓の眞偽、緇素の邪正を見分くることは極めて容易である。それに

もかゝはらず、昨今は特に主人面をして主人でないもの、お客面をしてお客でないもの、云はゞ偽主偽賓が多い。眞主眞賓を明白に辨見することは實に難事である。更に難事の中の難事は緇素の邪正である。』緇は僧、素は俗。俗であるから俗と思ふと僧であり、僧であるから僧と思ふと俗である。所謂、水乳相合するが如くで、其の邪正を辨別すること至つて難い。されど本則に出て居る大隋禪師の如き、當臺の明鏡、掌内の明珠、其の持主であるから、主賓を辨ずることも緇素を分つことも寸毫の思慮も分別も勞せず、胡來れば胡を現じ漢來れば漢を現じ、如何なる物に對しても、其の聲、其の色、決して見そこなひ、聞き



そこなひはない。可謂、天鑑無私、と。——學者の心が師家の明鏡明珠に對すると、心に思ふまゝ、心に欲するまゝ、寸毫も藏し得ず、それがそのまゝ、言語動作に顯れ、如何に隠さうとしても隠すことは出来ません。悉く師家の心鏡性珠に映徹す。師家は學者の心の總てを見透し盡す。それが正師家である。敢へて師家と學者に限りません。日常世交の上に於て亦復然りである。初相見の人の其の價值如何を知り其の人の心中如何を讀み盡すことが出来ねば、眞箇の世交家とは云へぬ。其のお手本は本則の大隋禪師その人である。行いて參すべし。進んで學ぶべし。

### ◎本則

舉、僧問大隋、劫火洞然大千俱壞、未審、這箇壞、不壞、隋云、壞、僧云、恁麼則隨他去也、隋云、隨他去、

### 讀方

舉す。僧、大隋に問ふ、「劫火洞然として大千俱に壞す、未審かし、這箇は壞するや、壞せざるや。」隋云く、「壞す。」僧云く、「恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや。」隋云く、「他に隨ひ去る。」

大隋、此人は益州の大隋山の法眞禪師。其法系は、





傳聞する處に依れば、大隋禪師は名聞利養の欲望を一切脱却した頗る眞面目のお方と云ふことである。時代は臨濟禪師と同時代。六十餘人の師家に歴參した學道の大熱心家。或人が、「一切衆生、肉、骨を包む。龜、何に依つて骨、肉を包む。」と問はれた。其答に大隋禪師、草鞋を以て龜に負はしめたと云ふ逸事がある。虚堂禪師は、大隋無作作、と云はれた。(意は只草鞋を

負はしたばかり。)大隋の手前には作略も伎倆もない。(若し毛髮ほどもあらば錯、大錯。)畢竟自己を忘じた活動である。大隋禪師、曾て滄山下に居ること數年、未だ一回も入室せず。滄山禪師、「なぜ入室せぬか。」と詰責せらる。大隋質す、「如何なることを問ふべきや。」滄山云く、「如何是佛と問ふべし。」大隋、手を以て滄山の口を掩うた。滄山、「汝已後出世すと雖も、薪水の世話する人がないぞ。」と記別された。此の一事を見ても大隋は作家の禪者であることが知れます。——「劫火洞然」或人は、佛敎家の宇宙論に基因して居る言葉である、と云はる、が、如何にも然りであります。此學説は無論佛敎以前から印度に行はれ



て居る哲學の一。劫火同然大千俱壞、と云ふ此語は、仁王護國般若波羅蜜多經の中の護國品第五に出てをる偈文。(古書にあるまゝ傳寫。)具さに掲ぐれば、「劫火洞然として大千俱に壞す。須彌巨海磨滅して餘す無く、梵釋天龍もろくの有情も尙皆殄滅す。如何に況んや此身をや。」と云ふのである。是を曾て大隋禪師が上堂に用ひられた。(問僧は、大隋の上堂を聞いてか、仁王經に依つてか、或は偶然に問うたものか、其の邊は不明である。)經文に依ると、世界は、成、住、壞、空、の四大劫に依るとある。劫とは梵語の劫波で、長時と譯す。即ち長い時間と云ふこと。抑々世界の始を成劫と云ふ、成立する間。——次に保

存する間、是を住劫と云ふ。——追々破れつゝある時節を壞劫と云ふ。——其の壞劫の次が空劫と云ふ順序である。『今は壞劫。壞劫の様子は、火災、風災、水災と云うてあります。』茲に本文にある劫火洞然は世界破壊の火災、それでありませう。——大千、具さには三千大千世界と云ふべき、それを今は略して大千と云ふ。佛教以前に須彌説が行はれてをる。其の説を佛教でそのまゝ今に至る迄使用して居ります。(實と云はゞ實、虚と云はゞ虚、虚實は其の人々の識見如何に依ります。)其の須彌説を極めて略解致しますれば左の如し。「須彌山と云ふ山の四面に洲が四つある。南にあるは南閻浮提、——東にあるは



東弗婆提、——西にあるは西瞿耶尼、——北にあるは北俱盧。——お互が現に住居してをります地球は須彌山の南に當る南閻浮提と云ふ部分であります。以上の四洲を下界として此の上に四天王、十八天、四重天と云ふのがある。是等を總て欲界、色界、無色界の三界と云ふ。其の中に悉く有情即ち生物が居る。今日の學說で、太陽系統に屬する諸星を一まとめにして一世界と云ふと同一である。——此の一世界が一千集つたのが小千世界、其の小千世界が更に一千集つたのが中千世界、其の中千世界が更に一千集つたのが大千世界である。』茲で云ふ大千は百億世界の略數である。意味は、數へきれない多くの

世界が壞劫の火災の爲に悉く洞然たる猛火の爲に燒き盡さるゝ時、と云ふこと。(是にも異說多種あります。——「未審」はてナ、思慮を弄する様子。更に婆言を下せば、右か左か、前か後か、はてナ、と首を傾くる底。——「這箇」コ、の這箇は狹義に云へば精神、靈魂。——廣義に云へば眞如、法性、又は菩提、涅槃、或は大我と云ふ、それらを指すのであります。——「去」消滅の意、燒壞の意味、痕迹を留めず。——茲に一人の僧あり。四川省の大隋山の法眞禪師のところへやつて來て、仁王護國般若波羅蜜多經にある、「劫火洞然として大千俱に壞す。未審、這箇、壞か不壞か。」と表面教意に托し、裏面に禪



機を隠し、檢主問と出かけた處は、たしかに一隻眼を具する底の衲僧。一氣に大隋禪師を土俵の外に放擲せんとする勢ひ、賞すべし讚すべし。』敢へて問僧の言句を借りるまでもなく、諸君お互が、世界破滅の時、人々本具の自性は壞するものか、壞せざるものか、多少禪學に指を染めたお方なら考一考せざるべからず。——飯田師の落草談が衲の云はんとする處を能く云ひ盡してをる。今それを拜借して後學初機の禪學者にお傳へ申しませう。飯田師云く、「這箇とはそのものそれぢや。——そのもの、外にそのものはない。そのもの、働きの靈妙なるを見て、佛性と云ふものがあつて支配するが如く想像してをる。物

にも斯かる靈妙の力が遍滿して無邊である。されど、何處にも左様なものがあるのではない。焼けた時は焼けたそのもの、それぢや。併しそのものが、そのものといはぬ。いつもそのものは空間的に無邊、時間的に無限。之是の空間と時間、無始劫より盡未來際まで、常に變化して止るものでない。その間に因果の法則が行はれて、差別整然として世は莊嚴されてをる。これを無自性とも空ともいふ。これが、ものそのもの、本性ぢや。これを這箇とも佛性とも名づけたまでぢや。物の外に別にあるのではない。その物をよく見ると、我といふものが認めらるゝ。廣く眼を放つて、何時もこのものは宇宙そのものである、と廣



く見ると我はない。修し得てそこに體達たいたつするのが見性といふのぢや。そのものゝ外に更に物のある筈はない。焼けたら焼けたそのものぢや。焼けたものが焼けたとは云はぬ。我はいつも焼けたり出来たりを實驗してをる。朝のからだは朝で、今は跡方もないが、晝は晝となつて生れてくる。夕方は、晝はやぶれて、そのおかげで夕方がある。それを大きくしたのがこの問題。宇宙即今自己はいつも空間的に無邊に、時間的に無限。無邊無限のそのものその外に自己はない、他己もない。否、自己も他己も皆そのものそれぢや、即ち這箇ぢや、と看破して世に立つとき、世と我と別物でないことが手に入る。眞に世を愛する大

心が出来てくる。大千の外に自己なく、大千中の森羅萬象の差別そのものを今自己として取扱ふことが出来る。成住壞空は、小は一刹那の事にも、一日の間にも、一年の間にもある。これがために活動もしつゝあるのである。この僧、這箇しよこが邪魔になる。這箇と宇宙と別物と見てをるから、宇宙の變化が氣にかゝる。佛性とは宇宙そのものゝ活動の靈妙なるを名づけたまで、別に佛性といふかたまりがわれらの身體に宿つて居るのではないことが分らぬ。まだ見性けんじやうしたことがないのである。』以上飯田師の説、聊か老婆すぎる所がないでもないが、時に依つて老婆すぎるも下化の一方便であります。されど第一義諦よりすれば、



エ、ヘンと一咳すれば、そのエ、ヘンで自然に三祇も百劫も一切の妄想も超越して居る、と云ふことを胸中に記して措くべし。

——流石は大隋禪師だ。早く問僧の胸中を見透して云く、「壊す。」と。——（水の濁り、毛の落つるを見て、主賓を辨じ、縞素を分たれた。）大千と俱に這箇も壊するぞ。——壊する時は壊すると同體になれ。生ずる時は生ずると同體になれ。死する時は死と同體、立つ時は立つと同體、坐する時は坐と同體。それが、そのまゝ、見性だ。それが大悟だ。それが佛だ。それが神だ。（云ふ勿れ、婆々談と。）若し恁麼の間へ毛ほども自己他己を入れたら、不可だ、不可だ、大々的不可なり。聞かずや、自

己なき時、自己ならざるなし、と云ふことを。宇宙が自己、自己が宇宙。宇宙の外に自己なく、自己の外に宇宙なし。宇宙は宇宙で、宇宙は知らず、自己は自己で、自己を知らざる所に、眞の宇宙があり、眞の自己がある。その眞の宇宙と、その眞の自己は、決して離れやうはない。必ず離すことは出来ぬ。斯く云へば云ふ様なものゝ、この様な手ぬるい説法では大隋禪師の壊すは我がものにならぬ。所謂、這箇の壊すは實參實悟すべきもの也。圓悟禪師、隋云く壊す、に下語して曰く、「無孔鐵鎚當面に擲つ。」と。如何にも無孔の鐵鎚で口の下し様がない。口の下し様のない處が禪味のある處。口の下しがたき壊すそのものを一口



に吞却し來れば萬劫飢を知らず、で大々の安心ができる。不幸にして問僧、一口に吞却する能はず、云く、「恁麼則隨他去也。」問僧は、拔群の漢と思ひの外、不拔群の愚僧で、どこまでも這箇と大千と別に、物と佛性と二つに見てをる。それでは千年たつても、隨處爲主、轉處能幽、となることは出來ぬ。折角大隋禪師の御親切も恁麼の意識を弄する底の人に逢うては半文錢の價值なし。——禪を意識で判斷するお方が昨今は特に多い様であります。禪は意識を弄する必用は更にありません。そのもの、それになれば、それでよいのである。——圓悟禪師は「沒量大人語脈裏に轉却さるゝ。」と下語して居らるゝが、中れり。

—— 況んや沒量の大人ならざる問僧に於てをや。壞すと云ふ語脈裏に轉却さるゝは無理のないことである。隋云、「隨他去。」若し黃檗禪師や徳山禪師であれば、無論三十棒、一棒も缺かさぬ處。幸なるかな大隋禪師で、問僧、喪身失命をまぬがれた。されど、隨他去の三字、實に三十棒より恐ろしい。圓悟禪師も此の三字に眼をつけて「前箭猶輕、後箭深。」と賛嘆して御座る。可謂、大隋禪師舌頭無骨。他に隨ひ去ると放つた大聲の一箭は、如何なるものでも貫一貫、射透せざるなし。諸君、誤つて斷無の外道になるなかれ。—— 要は心萬境に隨つて轉じ、箇々轉處に立在するにある。誓つて、壞、不壞に迷溺惑溺することを



止めよ。——問僧、大隋禪師の他に随ひ去る底の眞意を會する能はず、更に同問を提げて舒州の投子禪師を訪問す。投子云く、貴殿、何處に居つて修行なされた。僧云く、西蜀の大隋禪師の許にをりました。投子云く、大隋禪師は何と言ひし。僧、前話を舉げ自己の不會なることを加へ、改めてお教を請ひ三拜して立てり。時に投子禪師、香を焚き禮拜して云く、西蜀に古佛あり出世す、汝速に回れ。可謂、親言親句と。此の僧、教示に随ひ大隋禪師の處へ歸復す。残念なことには、此の時既に大隋禪師は遷化して居られた。』衲は問僧に同情を表す。大隋禪師の深意も會せず、投子禪師の心底も知らず、來々去々するは如

何にも氣の毒であるが、道を求むる親切、其の眞面目は賞讃せざるべからず。——唐の僧、景遵と云ふ人、大隋禪師に題して云く、

了然無別法、誰道印南能、一句隨他語、千山走衲僧、  
蚤寒鳴砌葉、鬼夜禮龕燈、吟罷孤窓外、徘徊恨不勝、  
雪竇禪師は此の偈の意味を用ひて本則の頌を作られた、と或人は云ふ。或は然らむ。

從容錄の三十則に、大隋劫火の話として萬松老人の示衆に、絶諸對待、坐斷兩頭、打破疑團、那消一句、長安不離寸步、太山只重三斤、且道、據甚麼令、敢恁麼道、とあります。如何に



も萬松老人の云はるゝ如く、參禪の要は一切諸の對待たいたいの見を絶し、迷悟凡聖是非得失等の兩頭を坐斷し、我他彼此の妄想だらゝの疑團を打破するにあります。坐斷し打破し來れば、長安敢へて遠からず、太山必ずしも重からず。寸歩を離れずして長安、太山の重量も僅かに三斤。斯くの如き大自在の活用底は畢竟如何なる法令に依りて然るや。その實例は、大隋禪師劫火の本則と指摘された、其の本則に、

舉、僧問大隋、劫火洞然大千俱壞、未審這箇壞不壞、隋云、壞、僧云、恁麼則隨他去也、隋云、隨他去、』こゝまでは碧巖錄と同一であります。次に

僧問龍濟、劫火洞然大千俱壞、未審這箇、壞不壞、濟云、不壞、僧云、爲甚なんとして不壞、濟云、爲同大千』とあります。龍濟は修山主しゅと云ふ當時有名の師家であります。問が同じであるから、先の僧が大隋禪師の處で不得要領、故に重ねて龍濟禪師に參じたものか。』問は同じでも全然別な僧が龍濟禪師に參問したものでか。』兩説あります。今は宗意が肝心、歴史上の件は休題。――

諸君、此の龍濟禪師の答は大隋禪師と正反對。一方が眞ならば、一方は偽。』一方が是ならば一方は非。』何れに同意すべきや。例に依つて言句に迷ふ勿れ。――不壞と云ふも壞に對する不壞でない。不壞の時は不壞の獨立無伴、壞の時は壞の獨立無伴。



然る道理を知らざるが爲に、僧云く、「甚せんとして不壞なるぞ。」重ねて問うたのである。對待を絶し兩頭を斷ぜざる確證である。如何に理窟が達者でも坐斷して居らぬ人は、愈よと云ふ處に到ると身の動かし様がない。濟云く、「大千と同じきが爲に。」下語に生鐵鑄成まてついで、とあるが、如何にも生鐵で齒はたゝぬ。劫火でも是は焼く能はず。古今未發の好言語。否、前代未聞殺人言。——大千と同じきが爲に、とは實に無舌の舌を以て無口の口を開き吐露された千古不磨の格言で、龍濟禪師の專有品である。大隋の他に隨ひ去ると異曲同工。——是を事實我がものになさんと欲せば、正身端坐、三昧王三昧に入るべし。然らざれば

大隋禪師や龍濟禪師に相見は出来ぬ。天童禪師の頌じゆに、

句裏兮無鈎鎖機、脚頭多被葛藤礙、とある。大隋でも龍濟でも、示さるゝ一言半句、悉く眞實語で、鈎や鎖で人を引掛けたり人を縛つたりする賊意野心は更にあるなし。然るに問僧が自分と自分で言詮文義に礙へられ、葛藤に自由自在の脚頭を縛せられてゐたのである。會得することの出来ぬのは二老禪師の咎に非ず、問僧の自業自得。騒げば騒ぐほど自由自在の分を失する。恁麼の問僧に似たるお人が僧侶にも俗人にも澤山あります。衲なの如きは無論その一人であります。

◎頌



劫火光中立問端、衲僧猶滯兩重關、可憐一句隨他語、萬里區區獨往還、

## 讀方

劫火光中に問端を立て、衲僧猶兩重の關に滯る。憐む可し、一句他の語に隨ふ。萬里區々として獨り往還す。』  
分解、併せて提講。

「立問端」質問又は疑問。——「兩重關」壞すると、壞せざると、其の兩重の關。又は物質と靈性、此の兩重の關と見るも悪しからず。——「隨他語」隨他語と隨他語と訓讀の差がある。隨他語と訓讀すれば、大隋禪師の壞にして、——隨他

去と云ふことになる。隨他語と訓讀すれば、僧が「恁麼則隨他去也。」と云うた語を指すことになる。今は隨他語と訓讀すべし。——「區々獨往還」或人は、區々は意氣揚々自負の様子、天が下で悟りし者は我れ獨りと云ふ意である、と云はれる。』或人は、問僧、言句に轉ぜられ、投子禪師と大隋禪師の間、往いたり還つたりセカくして居る有様は實に氣の毒、の意である、と。——何れも是と云へば是、——不是と云へば不是。諸君、お互は今日どう、——意氣揚々か、セカくか。——投子に問はず大隋に問はず、自分自身に問ふべし。お互は今方に劫火光中に居るのである。御承知か。——御



承知にしては如何にも大膽すぎる。其の任運騰々たる様子は大事了畢のお方の様に見える。』無論知らぬが佛で、御承知がないから劫火光中に安閑として起居動作して御座るのであらう。』若し間違つたら御容捨。』——僧、大隋禪師に向つて劫火洞然大千云々と問端を起し來つた處を、雪竇禪師吟じて劫火光中立問端と、如何にも目前に二災壞劫の大火が燄々として燃上つてをる中で問答をして居るが如くに拈吟なされたは、雪竇禪師の慣手段である。』問僧は果して劫火光中に直面して居るつもりであつたか否かは知れぬ。』諸君、お互は今方に非常時、劫火光中以上に直面して居るのである。故に問僧の如く、這箇壞あか不壞

かなど、暢長に問うて居る時ではない。生死事大、無常迅速。

——一たび人身を失すれば萬劫にも歸らず。今だ々々、今を失したら再び好機は來らず。然るに問僧は、徒に他人の唇皮禪を信じ、壞と云へば壞について往き、不壞と云へば不壞を追うて廻り、動けば動くほど、走れば走るほど、轉々自性の天真佛を失ひ、愈々本具の那一物に遠ざかることに氣がつかぬ。故に雪竇禪師に、可憐一句隨他語、萬里區々獨往還、と極めて不愉快の證明を附せられた。斯くの如く大言豪語さる、雪竇禪師其の人も、他の語に随つて東奔西走もなされたし、雪辛霜苦の無駄骨折りもなされたこともある。修行の進捗は、草鞋を踏破



すればする程修行が進歩し、安心の歸着は、蒲團を坐破すれば  
 する程安心が歸着する。諸君、徒食徒坐する勿れ。各自の分に  
 應じ、各自の職に對し、勤勉々々、不退轉に勤勉する。その處、  
 その中に、壞不壞に關せず、他に隨ふ如何を論ぜず、大隋禪師  
 も、投子禪師も、雪竇禪師も、釋迦も、達磨も、未だ曾て知らざる風露の  
 香ばしさがある。抑々風露の香とは如何。壞す、隨他去。――  
 それそれ、それである。珍重下座。

(昭和十二年十月二十三日講演)

386  
030

昭和十三年十月十二日印刷  
 昭和十三年十月十八日發行

發行兼  
 印刷者

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一  
 三井合名會社内

發行所

東京市日本橋區室町二丁目一番地一  
 三井合名會社考査課



終